

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：32681

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520180

研究課題名(和文) ジョン・ケージにおけるジャポニズムとオリエンタリズムの再検討

研究課題名(英文) The Consideration of Japonism and Criticism on John Cage

研究代表者

白石 美雪 (Shiraishi, Miyuki)

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号：60298023

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：実験音楽の作曲家ジョン・ケージがインドの芸術思想や日本の禅宗、中国の易経に関心をもったことはよく知られ、拙著『ジョン・ケージ 混沌ではなくアナーキー』で説明した。本研究はこうした研究蓄積に基づき、ケージが日本にどう紹介されたかを集中的に分析した。具体的には1960年1月1日から1992年12月31日までの『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』を対象に、ケージの名に言及のあった記事の調査を行い、目録を国立音楽大学大学院研究年報『音楽研究』に分割掲載した。また、ケージ自身のジャポニズムやオリエンタリズムを改めて分析し、第二次世界大戦後における異文化相互理解まで広げて考察し、その困難さを確認した。

研究成果の概要(英文)：Experimental music composer John Cage (1912-1992) was interested in Indian art ideas, Japanese Zen and Chinese I Ching. This fact is well known, and I also described it in "John Cage, anarchy rather than chaos" (Musashino Art University Press, 2009). Based on these research accumulation, I analyzed how Cage was introduced in Japan. Specifically, I surveyed the articles that had mentioned the name of Cage on "Asahi Shimbun", "Yomiuri Shimbun" and "Mainichi Shimbun" from January 1, 1960, until December 31, 1992. The survey and list until December 31, 1986 was reported on Kunitachi College of Music graduate Annual Report "Music Research" in three times. The last of them will be reported on the same journal in the future. And I also analyzed Cage's Japonism and Orientalism, and pointed out the difficulty of intercultural mutual understanding after the Second World War.

研究分野：音楽学

キーワード：ジョン・ケージ ジャポニズム オリエンタリズム アメリカ 前衛音楽 現代音楽 新聞批評 芸術史

1. 研究開始当初の背景

「ジョン・ケージにおけるジャポニズムとオリエンタリズムの再検討」(基盤研究(C)24520180)の研究開始当初の背景は、次のとおりである。

現代音楽の作曲家で美術や文学の分野でも活動したジョン・ケージ(John Cage, 1912-1992)が、1940年代後半から作曲のモチーフや技法として、インドの芸術思想や日本の禅宗、中国の易経に関心をもったことは周知の事実である。欧米のケージ研究においては、彼のジャポニズムとオリエンタリズムが繰り返し論じられてきた。代表例としては、東洋思想の膨大な引用を、モダニズム美学を強化する手段として跡付けた David W. Patterson “Appraising the Catchwords, C.1942-1959; John Cage’s Asian-Derived Rhetoric and The historical Reference of Black Mountain College”(1996年)や、あくまで音楽作品に定位しつつケージの東洋志向に言及した James Pritchett “The Music of John Cage”(1993年)が挙げられる。従来の研究では彼のインド哲学や易、禅の理解は作曲のためのテーマ設定や偶然性の技法を編み出す契機であって、創作に大きな転換をもたらした点では評価できるものの、表面的な受容だと考えられてきた。すでに研究代表者・白石美雪は著作『ジョン・ケージ 混沌ではなくアナーキー』(武蔵野美術大学出版局、2009年)において、「第三章 偶然性とラディカル・モダニズム 音楽の「形式化」の果てに」、「第四章 無心と融通無礙 二元論からの脱却」として、ケージの東洋理解を彼自身の言説に基づいて論じた。

しかしながら、このテーマを文化の相互作用という文脈において解明するためには、ケージ自身による言説とともに、彼に対して発せられた言説、とりわけ日本と米国双方の批評の分析が不可欠である。ケージの訪日は同時代の芸術家の関心を集め、多くの論評と報道がなされた。申請者はすでに「草月アートセンターの記録」刊行委員会編『輝け60年代*草月アートセンターの全記録』(フィルムアート社、2002年)において、1962年のケージ初来日に関する当時の批評の整理をてがけた。また、上野正章は「1961年の日本においてケージの音楽と思想はどのように広がっていったのか 第4回現代音楽祭の報道から考える」(『阪大音楽学報』第9号、1-19頁、2011年)で同時代の日本の批評を読み解き、来日以前のケージ受容を論じている。これらは基本的情報の整理となるが、対象の全容を示す段階には至っていない。

ここで同時代批評に注目するのは、研究代表者が行ってきた「明治期における総合芸術批評の形成」(基盤研究(C)、2009-2011年度)

によって獲得された方法論である。すなわち「明治初期の新聞における音楽評論の萌芽 『東京日日新聞』における福地源一郎の社説をめぐる」(『武蔵野美術大学研究紀要』第41号、2010年)と「演奏批評・楽評と称する批評の形成 1898(明治31)年の『読売新聞』の音楽批評」(『音楽研究』国立音楽大学大学院研究年報第24輯に投稿受理、2011年)における批評の読解と分析から、音楽の受容によって批評の言説が生まれるばかりでなく、批評の言説によって音楽の受容が方向づけられる相互作用が確認された。音楽が演奏者と聴衆の間で、すなわちコンサートホールで成立するだけでなく、批評家と批評の読者の間で、すなわちメディアで成立するのが近現代の芸術の特徴なのである。このような同時代批評を対象とする研究が十分になされていないことは現代芸術研究の弱点といえる。本研究ではケージが日本と東洋をどう見たかだけでなく、ケージが見た日本と東洋に基づく音楽を批評家や批評の読者がどう理解したかを重要な焦点とすることで、20世紀後半における日本の自国文化に対する意識そのものと、米国のジャポニズムとオリエンタリズム自体を、研究対象とすることができるのである。

2. 研究の目的

この研究はジョン・ケージを通じて、20世紀のアメリカ前衛芸術におけるジャポニズムとオリエンタリズムを再検討するものである。ケージが1940年代後半以降、日本・東洋へと傾斜したことは周知の事実だが、本研究では、創作理念および作曲技法上の表面的受容とされてきたケージの東洋理解を、明治以後の日本や東洋からの文化発信と戦後アメリカの多元主義的文化理解の成立という発信と受容の双方向の文脈において再検証する。同時代のケージおよび現代芸術の批評を読み直し、芸術史上のみならず文化史・思想史上の事象として捉え直すことによって、アメリカ前衛芸術におけるジャポニズム・オリエンタリズムのダイナミックな展開を明らかにする。

研究代表者は前掲『ジョン・ケージ 混沌ではなくアナーキー』に至る一連の著作においてケージ研究を推進してきた。本研究が明らかにする焦点は従来の多くの研究者によって対象とされてきたケージの作品と人物についての研究蓄積を踏まえつつも、もう一度それらを相対化・対象化してケージと日本・東洋との関係を分析し、20世紀後半の日本の文化発信とアメリカの多元主義的文化理解との関連で、前衛芸術におけるジャポニズムとオリエンタリズムを評価するところにある。

(1)文化情報の受容者としてのジョン・ケージという存在を基本に据えることで、20世紀のニューヨークを中心とする文化環境を確認する。たとえば、作曲技法に活用した易経についてケージは Richard Wilhelm, Cary F. Baynes, "The I Ching or Book of Changes", Princeton University Press, 1950 から情報を得たのだが、これは東洋の我々とは全く事情が異なる。彼の用いたテキストは漢籍が読めたドイツ人キリスト教宣教師が翻訳した易経をアメリカ人が英訳した重訳で、紹介された易占はコインによる擲銭法である。すなわち、ケージが受容した文化情報には「翻訳」というルートが不可避的に介在する。禅宗も鈴木大拙との接触とその翻訳に依拠している。現代作曲家としてのジョン・ケージについては、多くの研究者が楽譜や著作という印刷物や New York Public Library が公開した手稿類を史料として扱ってきた。申請者も前掲『ジョン・ケージ 混沌ではなくアナキー』の巻末に音楽作品リストを掲載して寄与してきた。本研究はそれらを再検討の俎上に載せるだけでなく、検討の範囲を刊行された楽譜や著作まで広げて検討する。これによって、彼のジャポニズムやオリエンタリズムの内実としての文化情報のルートを分析し、彼の芸術論を再評価する。

(2)文化情報の発信者としてのジョン・ケージという新たな視点から、1950年代、60年代のアメリカ前衛芸術家とその周辺、たとえばフルクサスのメンバーや当時のニューヨークで彼らと交流のあった一柳慧らにおけるジャポニズムとオリエンタリズムを再検証する。ケージの活動が媒介となって喚起された日本・東洋への関心を、当時の前衛芸術家の創作と著作において跡付ける。

(3)史料論として、ジョン・ケージに対する同時代の批評および記事を、日本と欧米の双方のメディアに即して再検討することで、彼のジャポニズムとオリエンタリズムがどう受容されたかを考察する。日本の新聞批評および記事を可能な限り調査し、日本・東洋への言及があるケージ批評を中心に分析する。

3. 研究の方法

この研究は「ジョン・ケージにおけるオリエンタリズムとジャポニズムの再検討」というテーマを史料研究として掘り下げるため、主として日本の音楽雑誌と一般の新聞雑誌における批評・記事とケージの著作を調査する。一般の新聞雑誌のアーカイブを網羅的に調査して、ケージ批評、ケージ史料の全体像を把握した上でデータベースを作成し、批評・史料に基づき、オリエンタリズムとジャポニズムに関する言説分析を行う。

各年度の研究計画は、前年度実績を踏まえ

た PDCA サイクルで修正しながら進めたが、次の通りである。これによって、申請当初の計画としての海外資料調査は 1 回に縮減し、国内の新聞記事データベースの電子情報の検索可能性の低さから、一つ一つの記事を研究分担者等に依頼して拾い起こす作業に、労力と時間を投入した。

第 1 年度 (2012 年度): ケージ史料の把握と批評および記事調査

4 年にわたる研究の初年度として、研究対象のケージ批評および記事、ケージ史料に関する所在と実態を把握するため、全体的な調査を行う。

・アメリカと日本におけるケージを対象とする批評および記事の把握: 『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』とアメリカの主要新聞データを把握する。

・アメリカのジョン・ケージ原稿・草稿等の所在調査: ケージの自筆譜や書簡のほか、ピアニストのデヴィッド・テュードアによるケージ作品のための演奏譜やアラン・カブロー、ディック・ヒギンズらフルクサスの作家たちの史料を数多く所蔵するロサンジェルス

の Getty Research Institute の調査を実施する。

第 2 年度 (2013 年度): ケージの言説と批評分析

・アメリカと日本におけるケージを対象とする批評および記事の把握 (継続)

・オリエンタリズムとジャポニズムに注目した言説分析

第 3 年度 (2014 年度): 批評分析の進展と成果発表

・アメリカと日本におけるケージを対象とする批評および記事の把握 (継続) およびオリエンタリズムとジャポニズムに注目した言説分析

・ケージ以降の前衛芸術家におけるオリエンタリズムとジャポニズムの調査

最終年度 (2015 年度): 批評分析のまとめと成果発表

・アメリカと日本におけるケージを対象とする批評および記事の把握 (継続) およびオリエンタリズムとジャポニズムに注目した言説分析

・ケージ以降の前衛芸術家におけるオリエンタリズムとジャポニズムの言説分析

・研究成果の発表として 2016 年 5 月 15 日刊行予定の『ニューヨーク 錯乱する年の夢と現実』(論集・西洋近代の年と芸術 No.7、竹林舎)に掲載する。なお、同年までに刊行できなかった論文類は 2016 年度以降に順次公開する予定である。

この研究の遂行の研究体制としては、研究代表者が単独で行う形態とした。さらに 2009-2011 年度に取り組んだ研究課題「明治期における総合芸術批評の形成」(基盤研究

(C)21520164、研究分担者：今岡謙太郎・武蔵野美術大学教授、高橋陽一・武蔵野美術大学教授)において音楽資料としての新聞記事を使ったジャーナリズム研究の手法を発展させた。この共同研究の研究分担者であった今岡謙太郎と高橋陽一両名は、今回の共同研究では連携研究者として日本芸能史や国学・日本教育史研究の立場から、テーマとなるジャポニズムやオリエンタリズムを分析するための専門的知見を提供する役割を受け持った。さらにジョン・ケージの新聞記事の収集のためには、田中美香(フルート奏者)、小林幸子(音楽学)、稲崎舞(音楽学)に研究協力者としての作業を依頼した。

4. 研究成果

第1年度(2012年度)は「ケージ史料の把握と批評および記事調査」、すなわち4年にわたる研究の初年度として、研究対象のケージ批評および記事、ケージ史料に関する所在と実態を把握するため、全体的な調査を行う計画であり、この計画通りに実施した。計画の実施にあたっては、連携研究者である今岡謙太郎(武蔵野美術大学)と高橋陽一(武蔵野美術大学)との研究会を行った。

(1)アメリカと日本におけるケージを対象とする批評および記事の把握：日米の音楽雑誌と一般の新聞雑誌におけるジョン・ケージに関する批評および記事を網羅的に調査し、『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』などの主要新聞の記事データを調査した。

(2)アメリカのジョン・ケージ原稿・草稿等の所在調査：すでに実施した New York Public Library のジョン・ケージの原稿類を調査に加えて、ロサンジェルス Getty Research Institute への訪問調査を実施することができた。これによりケージの自筆譜や書簡を含むデヴィッド・テュードア文書など、貴重な資料を確認することができた。

研究成果の発表としては、ジョン・ケージの作品である「ミュージサーカス」(2012年8月26日、サントリー芸術財団主催・サントリーホール)の芸術監督として、オリエンタリズムとジャポニズムを象徴する企画を実施した。また『ユリイカ』2012年10月号、『音楽現代』第12巻第11号、『アルテス』Vol.04, 2013SPRING にジョン・ケージに関する論文を発表した。

第2年度(2013年度)は「ケージの言説と批評分析」として、前年に引き続き、研究対象のケージに関する批評および記事、ケージ史料に関する所在と実態を把握すると同時に、オリエンタリズムとジャポニズムをめぐって、ケージの著作および日米の新聞批評に関する分析を行う計画で、一部、研究調査の予定は変更したが、研究はほぼ計画どおり

実施した。計画の実施にあたっては、連携研究者である高橋陽一(武蔵野美術大学)と今岡謙太郎(武蔵野美術大学)から、資料の扱い方に関する助言を得た。

(1)アメリカと日本におけるケージを対象とする批評および記事の把握(継続)：日本の一般の新聞におけるジョン・ケージに関する批評および記事を簡単なものまで含めて網羅的に調査し、『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』などの主要新聞の記事データを1960年代に絞って、目録としてまとめた。

(2)オリエンタリズムとジャポニズムに注目した言説分析：ケージ自身の文章と、彼を対象とするアメリカの批評および記事から、オリエンタリズムとジャポニズムに関する記述の言説分析を行った。とくにアメリカにおける初期の新聞批評・記事において、ジャポニズムとオリエンタリズムに関する記述が予想以上に少なかったことが確認された。

(3)オリエンタリズムとジャポニズムに注目したケージの作品分析：オリエンタリズムとジャポニズムの観点からケージの作品分析を行った。予定とは異なり、当年度はアメリカへの調査旅行は実施せず、禅や易経との関係を論じた新しい研究書を参考にしながら、出版楽譜から可能な範囲で分析した。研究成果の発表としては、国立音楽大学大学院研究年報『音楽研究』第26輯に1960年代の日本の新聞におけるジョン・ケージ記事目録を掲載することができた。

第3年度(2014年度)は「批評分析の進展と成果発表」として、前年に引き続き、研究対象のジョン・ケージに関する批評および記事、ケージ史料に関する所在と実態を把握する作業を進めた。同時に、オリエンタリズムとジャポニズムをめぐって、ケージ自身の文章と彼を対象とするアメリカの批評と記事および日本の批評と記事から、日本・東洋に関する記述の言説分析を行った。引き続き、オリエンタリズムとジャポニズムに関する言説の分析を行う計画であり、一部、研究調査の予定、研究対象に関する範囲を変更したが、研究はほぼ計画どおり実施した。研究成果の発表としては、国立音楽大学大学院研究年報『音楽研究』第27輯に1970年代の日本の新聞におけるジョン・ケージ記事目録を掲載することができた。

(1)アメリカと日本におけるケージを対象とする批評および記事の把握(継続)およびオリエンタリズムとジャポニズムに注目した言説分析：日本の一般の新聞におけるジョン・ケージに関する批評および記事を簡単なものまで含めて網羅的に調査し、『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』などの主要新聞の記事データを1970年代に絞って、目録としてまとめ、ケージ自身の文章と、彼を対象と

する日本の批評および記事から、オリエンタリズムとジャポニズムに関する記述の言説分析を行った。1950年代の批評および記事に頻出していたジャポニズムとオリエンタリズムに関する記述は、60年代、70年代と数が減少していったことが確認された。

(2) ケージ以降の前衛芸術家におけるオリエンタリズムとジャポニズム：アラン・カブロー、ディック・ヒギンズらとケージの影響関係を文献においてあらためて確認しながら、オリエンタリズムとジャポニズムに関する言説に関する調査を開始した。

第4年度(2015年度)は「批評分析のまとめと成果発表」として、前年に引き続き、研究対象のジョン・ケージに関する批評および記事、ケージ史料に関する所在と実体を把握する作業を進めた。同時に、オリエンタリズムとジャポニズムをめぐって、ケージ自身の文章と彼を対象とする日本の批評と記事から、日本・東洋に関する記述の言説分析を行った。さらに、このテーマに関わる最新のケージ研究等を参照しながら、論文においてケージのアジア理解を一つのモデルとして詳述しつつ、第二次世界大戦後における異文化の相互理解まで広げて考察し、その困難さを指摘した。

4年間(2011-2015年度)の研究により、発行部数の多い日本の三大新聞『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』の1960年1月1日から1992年12月31日まで、ケージの名前に言及している記事の調査を行った。新聞のデータベース化が進んだ現代では簡単な調査だと思われるかもしれないが、全文記事検索機能があるはずのこれら三紙でも、じつは洩れ落ちる記事が数多い。今回の研究では協力者で手分けして、すべての紙面に眼を通した。第4年度までに1986年12月31日までの目録を作成し、国立音楽大学大学院研究年報『音楽研究』に3回に分けて掲載した。さらに1987年1月1日以降のデータもすでに調査済みだが、今年度以降、引き続き目録として発表予定である。この基本データから日本の新聞読者へどのようにケージの情報が届けられたのかがわかり、その中でオリエンタリズムに関わる記述は60年代以降、減少していったことがわかった。また、今後のケージ研究においても参照点となる資料を提示できた。

この研究成果の着想や手法は、研究代表者として2016年度からの科学研究費補助金による研究課題「近代日本における職業としての音楽評論家の成立過程」(基盤研究(C)16K02252)に発展させることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文](計10件)

白石美雪、1980年代後半の3大新聞にみるジョン・ケージ 記事目録と分析、国立音楽大学大学院研究年報『音楽研究』第28集、査読有、2016、17-32

白石美雪、井上郷子、ケージの不確定性音楽 「図形楽譜の読みとき方」、国立音楽大学研究所年報第27集、2015、230-234

白石美雪、1970年代の3大新聞にみるジョン・ケージ 記事目録と分析、国立音楽大学大学院研究年報『音楽研究』第27集、査読有、2015、1-16

白石美雪、1960年代の3大新聞にみるジョン・ケージ 記事目録と分析、国立音楽大学大学院研究年報『音楽研究』第26集、査読有、2014、17-32

白石美雪、書評 Martin Iddon: John Cage and David Tudor, Correspondence on Interpretation and Performance(Cambridge: Cambridge University Press, 2013, 225pp. ISBN 978-1-107-01432-9)2014、『音楽学』第59巻2号、査読有、日本音楽学会、2014、103-4

白石美雪、20世紀音楽の楽譜を読むとは? - 「作曲家の発想の変化が楽譜の変化を生む」、国立音楽大学研究所年報第26集、2014、117-120

白石美雪、カウエルとケージの「新しいピアノ」 「内部奏法からプリペアド・ピアノまで」、国立音楽大学研究所年報第26集、2014、152-156

白石美雪、ジョン・ケージ ことばの贈りもの、アルテスVol.4、2013、42-51

白石美雪、ジョン・ケージ略年表、ユリイカVol.44-12、2012、243-248

白石美雪、ドキュメント・日本のミュージサーカス2012年8月26日の試み、ユリイカVol.44-12、2012、202-210

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計2件)

白石美雪、田中正之 他、竹林舎、『ニューヨーク 錯乱する年の夢と現実』(論集・西洋近代の年と芸術 No.7、) 2016年刊行予定(原稿提出済)

白石美雪、横井雅子、宮澤淳一、武蔵野美術大学出版局、『音楽論』、383

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

なし

取得状況(計 0件)

なし

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

白石 美雪 (SHIRAIISHI Miyuki)

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号：60298023

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

今岡 謙太郎 (IMAOKA Kentaro)

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号：30277777

高橋 陽一 (TAKAHASHI Yoichi)

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号：70299957

(4)研究協力者

田中 美香 (TANAKA Mika)

小林 幸子 (KOBAYASHI Yukiko)

稲崎 舞 (INAZAKI Mai)